

縄文人は喋っていたのか？

門田英成（アイヌ地名懇親会）

1. はじめに

昨年、青森県の三内丸山遺跡見学の手がかりがありました。三内丸山遺跡は、今から約5,900年～4,200年前までの1,700年も続いた、縄文時代の大集落の遺跡で、30年前の1994年に発見されています。それまでの野蛮で狩猟しての移動生活するという、縄文のイメージ・考えが大きく変えられることになりました。そして、2021年には、三内丸山遺跡を含めて北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産に登録されています。

三内丸山遺跡は、甲子園球場グラウンドの約30倍、東西700m・南北600mの42haの広大な遺跡です。最盛期の竪穴住居数は約100棟、500名ほどの縄文の人たちが1700年間もの長期間の定住生活をしている、ことが分かって来ています。高さ15mの大型掘立6本柱、32mもある大型竪穴建物の巨大な建築物をも作られています。15mもの大型掘立柱を建てるにあたっては、大声で掛け合い、時には怒鳴りあいの声も聞こえてきそうです。

しかし、どんな言葉を掛け合っていたのでしょうか？ いや、そもそも、縄文時代に「縄文人は喋っていた」のでしょうか？ 「縄文人は喋っていた」ものとして、縄文文化について語られています。では、「縄文人が喋っていなかった」としたら、縄文文化はあったのでしょうか？ では、「縄文人が喋っていた」ことを、どのように証明出来るのでしょうか？

2. 調査方法

(1) そもそも、縄文人は「喋る機能」があったのか？

① チンパンジーとの比較

チンパンジーは、ゴリラと共にヒト科に分類され、DNAの98%が人間と同じと云われています。しかし、チンパンジーは、喋ることは出来ません。

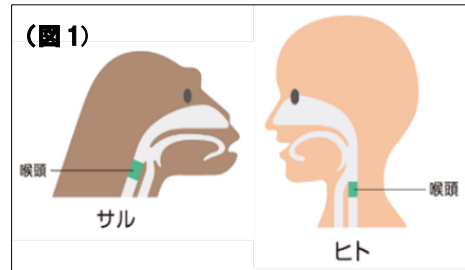
それでは、どうして言葉を喋ることが出来ないのでしょうか？

身体の違いをみると、ヒトの喉頭はサルと比べて低い位置に配置されています(図1)。

言葉は、二足歩行と深い関係があるようです。二足歩行を行うことで、重力により、気管、気管支、それに肺が下降し、それに伴って、喉頭の位置も下がってきています。

ヒトの喉頭がサルよりも低い位置にあることで、喉に大きな空間を作り、声帯、舌を使って共鳴させることで声を出すことが出来るようになりました。

残念ながら、チンパンジーは、完全二足歩行が出来ません。喉頭の位置が高く、共鳴空間が小さいために、マ行・バ行・パ行・ファ行などの口唇音がやっとならざるに過ぎないようです。



② 縄文人は

縄文人は、現代人と同じホモサピエンスの仲間とされており、頭骨の形質も同じと思われまふ。したがって、喉頭の位置、神経経路は、チンパンジーとは異なり、喋る機能は持っていたといえます。しかし、それだけでは当時、「縄文人が喋っていた」とは云えませんが。

(2) 縄文人が「喋べていなかった」、としたら

縄文人が、言葉を「喋べていなかった」、としたら、縄文文化は生まれなかった、のでしょうか？

① 「喋べれない」猿・チンパンジーの文化・道具使用

猿・チンパンジーは、喋れなくても、下記の文化が見受けられます。

・釣りを差し込んだシロアリの釣り。アリの巣口の大きさ、道具の材料の利用可能度合いに応じて、さまざまな釣りをを使い分ける。

・石器を使って、アブラヤシなどの堅果を割る（注1）。

・表情、鳴き声、ジェスチャーなどを使って、自分の意思や感情を伝える。

②縄文人は「喋っていた」、としたら、6本柱を立てることが出来たか？

縄文の人々は、竪穴式住居建物・縄文土器・丸木舟を作り、狩猟生活を行い、埋葬までも行っていた、といわれています。三内丸山では、500人の縄文の人々が1700年もの間、甲子園球場グラウンドの約30倍の広さの中で生活し、32mもある大型竪穴建物の巨大な建築物や図2のような、高さ15mの巨大な6本柱も組み立てています。

縄文人が「喋っていた」、としたら、図のような6本柱を組み立てることが出来たのでしょうか。



6本柱の立て方

6本柱は、高さは15m、3~4階建てのビルに相当、重さは1本が約5トン(底の直径1m、穴の深さ2m)、同じ高さの木の電柱(直径20cm)の25本分相当。

諏訪大社の御柱とほぼ同じ大きさ(直径1m、高さ17m)。

組立までには、まず、木の切出し→運搬→立上げの作業が必要で、それを労働力・技術・共同作業も必要となります。

立上げの作業については、諏訪大社の御柱祭りの「建て御柱」が映像等で見られますが、縄文の時代とは違って、丈夫なロープ、クレーンが使われています。

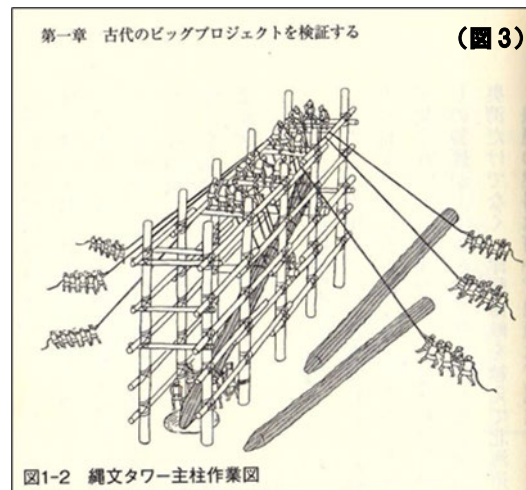
長野正孝氏は「古代史のテクノロジー」で(図3)のように想定されています。図の工法は、「現場あわせ」という設計図場なくとも、現場で打合せしながら立てられる方法とのこと。

この作業が「喋べらない」で打合せが出来るのでしょうか。

前述のように、チンパンジーは、道具も使用、状況により使い分けも出来、表情・鳴き声・ジェスチャーなどを使って、自分の意思を伝えられるようです。

「喋べらない」チンパンジーでもそうであれば、縄文の人たちは、チンパンジー以上に、「喋べらない」でも、ジェスチャーで体で表現出来るのではないか、とも考えられます。

しかし、5トンもの重さの木を立上げるのには、図のような作業を想像すると、掛け声はもちろん、会話なしでは出来ないのではないか、と思われる。諏訪大社の御柱祭の大声が聞こえてきそうです。



(3)縄文人が「喋っていた」とすると

①縄文の言葉の残有

縄文時代に「縄文人が喋っていた」という直接証拠はありません。

しかし、「縄文人が喋っていた」としたら、以下の中に、縄文の言葉＝「縄文語」が残されている可能性が考えられます。

1. 現在の言葉、特に方言
2. 古事記・日本書紀、万葉集、風土記
3. 地名

②「アイヌ語地名」でアプローチ

しかし、「縄文の言葉」が方言・記紀万葉・地名の中に残されているとしても、それが、どうして、「縄文の言葉」と、いうことが出来るのでしょうか？

「アイヌ語地名」でアプローチしてみます。

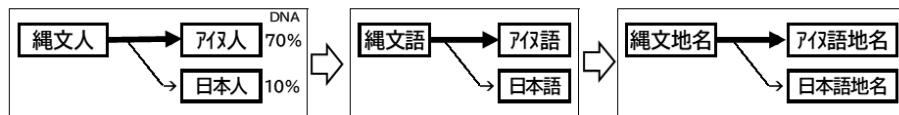
1. 「アイヌ語地名懇親会」とは

私たち「アイヌ語地名懇親会」は、日本語では理解出来ない、不思議な地名を、北海道だけでなく「全国の地名をアイヌ語で解き明かそう」という集まりです。解き明かされた地名は「アイヌ語地名」といいます。

2. 「アイヌ語地名」とは

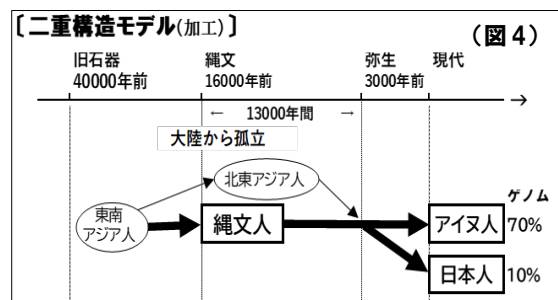
アイヌ語地名は、ゲノム解析で裏付けられた「二重構造説」(下記図4)を根拠にして、アイヌの人は、縄文人の直系である(縄文人≒アイヌ人)を前提とし、「アイヌ語は縄文語を残有している」(縄文語≒アイヌ語)を仮説として、アイヌ語で読み解こう、とするものです。

日本語では読み解けないが、アイヌ語では読み解け、地形等と一致する地名は、「縄文地名」であり、それを「アイヌ語地名」と呼んでいます。(縄文地名=アイヌ語地名)



a. 二重構造モデル(二重構造説)とは

日本人の起源を示す「二重構造モデル」は東南アジア系の縄文人に北方アジア系の渡来人が混血し日本人が形成されたとする。東京大学名誉教授、国際日本文化研究センター(日文研)名誉教授の埴原和郎(1927~2004年)がこの仮説を発表して30年。



b. アイヌの人は縄文人の直系(DNA約70%)

2019年5月13日、国立科学博物館が「縄文人の全ゲノム解読」、「従来、形態的な特徴などの研究から言われていたこととほぼ一致した」(神澤秀明・国立科学博物館)と報道されました。

*縄文人ゲノムの受継ぎ

- 北海道のアイヌの人たち 約70%
- 沖縄県の人たち 約30%
- 本州の人々 10%

また、2021年11月28日には、「埴原和郎二重構造モデル論文発表30周年記念の公開シンポジウム」が開催され、そこで、二重構造モデルを明確に支持の結果となっています(注2)。

c. 地名は長期間残る

縄文時代は、1万6000年前から3000年前の1万3000年間、大陸から孤立し、また、言葉をはじめ、大きな影響・変化も受けず、独自の縄文文化を生み出しています。

また、「地名は長期間残る」をも仮説としています。「ライン川」等、ケルト地名の例のように、数千年耐えられることは、世界的に認められています。

3. アイヌ語地名の例

a. ヴォヴィン説

アイヌ言語学者ヴォヴィンは、『萬葉集と風土記に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布2008』を著し、その中で、本州各地の地名(武蔵野・足柄)の他、『万葉集』の東歌と防人歌にみられる、しだ(時)や『風土記』にみられる特殊な普通名詞や人名などをもとに、古代の東北、関東、中部、西北九州にアイヌ語の名残が残存していた、アイヌ語は本来、日本列島の全域に分布していた(注2)、ことを述べています。

b. 村崎説

また、アイヌ語学者村崎恭子先生は、有明海周辺にアイヌ語で解釈出来る地名が濃密に分布するとし、網田は^{おうだ}ota(砂)、小田良は^{おだら}ota-ra(砂丘の低地)、大田尾は^{おおたお}ota-o-i(砂の多いところ)、宇土は^{うと}ota-etu(砂・岬)と解釈出来る、としています(注3)

c. その他、全国のアイヌ語地名例(注4)

1. 全国にあるアイヌ語地名

「平」地名 pira 崖 (平が崖)

「ナイ」「ベツ」地名 nay. pet 川

2. 沖縄にもある、北海道『アイヌ語地名』

- (イ). ^{ひらうち} 平内 pira-utur 崖の間
- (ロ). トケシ to-kes 海尻
- (ハ). 烏帽子岳(山) e-pesi 頭が岩崖 (全国にあり)
- (ニ). ^{くし} 久慈 kus 川 (岩手県にも)、
- (ホ). ^{たるまい} 樽舞 taor-oma-I 川岸の高いところ(〈そこに〉ある・もの)

3. 結果と考察

(1). 結果

1. 縄文人は「喋る機能」があった。
2. 縄文人が「喋っていなかった」場合、三内丸山遺跡の6本柱を立てるのは難しい。
3. 日本語では理解出来ない地名(北海道だけでなく全国の地名)をアイヌ語で読み解ける。

(2) 考察

1. DNAで裏付けられた「二重構造説」を根拠に「アイヌ語は縄文語を残有」している。
 2. 「地名は長期間残る(地名は「言葉の化石」)」
- 以上を仮説として、日本語では読み解けないが地名をアイヌ語で読み解くと、アイヌ語で読み解け、地形等と一致する地名は「アイヌ語地名」であり、それは「縄文語地名」である。
- このことは同時に、仮説「アイヌ語は縄文語を残有」を証明したことにもなる、といえます。

(結論).

つまり、「アイヌ語地名」とは、「縄文時代」に・「縄文語」で・「縄文の人」が「縄文語で名付けた地名」です。

ゆえに、縄文語を「縄文人は喋っていた」といえるのではないのでしょうか。

(参考)

- (注1). 京都大学大学院人類進化論研究室「野生チンパンジーの世界へようこそ」)
- (注2). ヴォヴィン「萬葉集と風土記に見られる不思議な言葉と上代日本列島に於けるアイヌ語の分布 2008」
- (注3). 瀬川拓郎「縄文の思想」(講談社現代新書)
- (注4). 門田英成「言葉化石」(共生ひろば)
- (図1). 香田啓貴「サルの発声から見るヒトの言語の起源」京都大学霊長類研究所
- (図2). 三内丸山遺跡(青森): 縄文大集落と大型建造物の謎
- (図3). 長野正孝「古代史のテクノロジー」PHP新書